

生きた人形

小川未明

青空文庫

ある町の呉服屋の店頭に立って一人の少女が、じつとそこに飾られた人形に見いってました。人形は、美しい着物をきて、りっぱな帯をしめて、前を通る人たちを誇らしげにながめていたのです。

「私わたしが、もしあのお人形にんぎょうであつたら、どんなにしあわせだろう……。なんの苦勞くろうもなしに、ああして、平和へいわに、毎日暮らしまいにちくていくことができる。そして、前まえを通る男とおも、女おんなも、みんな自分じぶんを振りかえつて、うらやましげに見ていくであらうに……。」「と、彼女かのじよは、ひとり言ごことをしていたのでした。

このようすを、さつきからながめていた、この店の主人みせしゅじんは、

頭あたまをかしげました。

「なんという器きり量りょうのいい娘むすめさんだろう……。しかし、ようすをみると、あまり豊ゆたかな生せい活かつをしているとは思おもわれぬ。さつきから、ああして、人にんぎょう形ぎょうに見みとれているが、ものは相そう談だんだ。あの娘むすめさんは、雇やとわれてきてくれないだろうか？」と、主人しゅじんは考かんがえたのでした。

「もし、もし。」といいながら、彼かの女じよのかたわらへ寄よつて、主しゅ人じんは、軽かるく、その肩かたをたたきました。

少しょう女じよは、びっくりして、振ふり向むきますと、主しゅ人じんが、ここここした笑わらい顔がおをして立たつていました。

「おまえさんは、さつきから、なにを考かんがえておいでなさる？」と、

主人しゅじんは、やさしく問といかけました。

少しょう女じよは、ちよつとはじらいましたが、正しょう直じきに、

「もし、私わたしが、このお人にんぎよう形ぎようであつたら、世よの中なかの苦く勞ろうとい

ことも知らしず、そのうえこんなうつくに美かしい顔おをして、どんなにか幸こ

福うだろふくうと思おもつていたのです。人にんげん間かんが、なんでも思おもつたとお

りになりさえすれば、この世よの中なかに、不ふ幸こうというものはないと考かんが

えていたのです。」と、答こたえました。

人ひとのよさひとそうひとな主しゅじん人じんは、けたけたと笑わらいました。

「お嬢じようさん、あなたのお顔かおは、この人にんぎよう形ぎようよりはよつぽど、美うつく

しゆうしゆうごござざいますよ。もし、あなたさえ聞きいてくださるなら、こ

のにんぎよう人じん形ぎようの着き物ものをあなたにあげて、そのうえ給きゆう金きんもさしあ

「げますから、明日から、人形の代わりになってください

ませんか？」と、主人は、少女に向かつていいました。

「お人形の代わりにですって？」

「そうです。生きた人形となつて、この店さきにすわつてく

ださるのです。」

「私が、お人形になるのでございますか？」と、少女は、

黒い、うるおいのある目を大きくみはりました。

「そうしたら、どんなに、この店の評判となるでしょう。あ

なたは、たしかに、この人形よりは、幾倍美しいかしれな

い。」と、主人はいいました。

少女は、じょうだんでなく、ほんとうに主人が相談を

しましたので、自分には、願いのあることでもありませんから、なにをして働くのも同じだと考えて、とうとう翌日から、この店の飾りをつとめる、生きた人形になることを承諾しました。

生きた人形が、店飾りになったというわさが四方に広まりますと、町の人々は、みんな、一度それを見ようと前へやってきましたので、この呉服店の前は、いつもにぎやかでありました。

「なかなか美人じゃないか？」

「あの、青っぽい着物が、ばかに似合っている。」

こんなように、そこに立った人々の口から交わされたのです。

「きつと、これから、生きた店飾りが流りゆうこう行することだろう……。」と、また空くうそう想にふけりながらゆくものもありました。いままで、客きやくを前まえに集あつめた人形にんぎようは、ただ美うつくしいばかりで、笑わらうこともなければ、動うごくこともなかった。どうせ、お人形にんぎようだといふので、見みる人ひとたちも、それを要よう求きゆうするものはなかつたけれど、これいが、生いきている人にんげん間なかだとわかると、中なかには、美うつくしい少しょう女じよに向むかっはなて話はなしかけるものもありました。けれど、店みせの飾かざりとなつていはなるうはなえは、だれとてはなも、みだりに話はなしてはいはなけないといふことになつていはなましたので、少しょう女じよは、返へん事じをしなかつたのでありますが、あまりおかしうごいときには、ついにっうごりうごと笑わらうこともありました。そして、また体からだも動うごかさうごずにいられ

ませんでした。

「なるほど、この人形は生きています！」といって、いまさらのように感歎する人もあつたのです。

「やはり、生きていますほうが、見ても張り合いがあつていいな。死んでいる人形では、つまらない。よく、考えついてものだな。」

こんなことをいって、ほめる男もありました。こういうふうに、昨日までの、ものをいわない人形は、どこへか隠されてしまつて、生きている人形の評判は、日にまし高くなりました。

少女は、夜になつてから、店が閉まると、自分の宿へ帰りました。

ました。いろいろの人が、帰り道に声をかけました。しかし、少女は、心に願いがあつたので、気がしまっていましたから、けつして、よけいな言葉などはかわしません。さつさと道を歩いてゆきました。

ある月夜の晩のことです。少女があるいてゆきますと、うしろから自分を呼びとめるものがあります。それは、いつにないやさしい声であつたから、ふと立ちどまってふり向きますと、おばあさんでありました。

「おまえさんには、青い色がよく似合うこと。ほんとうに、美しい娘さんだ。しかし生まれはこの町の人でないようだが、どうして、この町へきましたか。知った人でもおありなさるのかね。」

と、たずねました。

少女は、おばあさんなので安心して、つい自分の身の上を語ったのです。

「いいえ、私は、まったく一人ぼっちなのでございます。お母さんと二人で、家にいましたときは、どんなに幸福でしたか……。お母さんは、私をかわいがってくださいました。お父さんのお顔を知りません。ごく私の小さいときになくなられたんですもの。そして、兄さんがありましたけれど、私の六つのときに、家を出して、そののちたよりがないので、かわいそうなお母さんは、死ぬまで、兄さんは、どこにどうしているだろうと聞いていなさされました……。」

おばあさんは、少女しょうじよの話はなしを月つきの下したで、すこしも聞ききもらすまいと耳みみを傾かたむけていました。

「それで、おまえさんは、家いえなしになつてしまつたのですかい。」
と、おばあさんはいつた。

「家いえなしに？」

少女しょうじよは、なんとというさびしい言葉ことばだろう？　こういわれると、胸むねがふさがるように悲かなしかつたのでした。なるほど、考かんがえれば、もうどこにも自分じぶんの帰かえる家うちはない。ただこのうえは、ひとりあにの兄あにをどうしてもさがさなければならぬという、日ひごろの願ねがいに、
氣きがひきたつたのです。

「お母かあさんがなくなつたので、私わたしは、兄にいさんをさがしに、故こきよ

郷を出ました。しかし、旅をしている間に、持っているだけの旅費を使いはたしましたから、この町で働いて、また旅をしようと思つています。」と、答えました。

「それは、感心なことだ。けれど、あてもなく歩いたつて、皆さんにめぐりあうことは、むずかしいもんだ。」と、おばあさんはいった。

これを聞くと、少女は、月の下で、霜になやんだ弱い花のようにおれてしまいました。

「おばあさん、どうしたら、私はこの世の中で、ただ一人の兄さんにめぐりあうことができるでしょうか……。」と、訴えたのです。

しらがあたま
白髪頭のおばあさんは、かんが考えていましたが、

「それは、ほうぼう方々の人の出入りするところへ行って、いろいろの
ひと人に、おまえさんの兄さんの話をして聞いてみなければ、わかり
つこはないよ。わたし私がいいところへつれて行ってあげるから、明日
の晩に、町はずれの橋の上について待つておいで……。きつとだ
よ。わたし私は、おまえさんの身の上を悪くとりはからわないから。」
と、おばあさんはいいました。

しょうじよ少女は、しんせつなおばあさんだと思つて、その夜は別れ
て帰りました。

よくじつ翌日になると、しょうじよ少女は、にんぎよう人形のかわりになつて、みせ店
さきでつとめるのも今日かぎりだと思つと、まち町の景色を見るにつ

け、なんとなく、もの悲かなしかつたのであります。

呉服店の主人ごふくてん しゅじんというのは、気軽きがるなおもしろい人ひとでした。少

ようじよ

女にょは、自分じぶんの身みの上うえを打ちあけて話はなしたのは、おばあさんと

しゅじん ふたり

主人しゅじんの二人ふたりぎりでしたが、主人しゅじんはどうかして、兄にいさんにあわ

してやりたいと、蔭かげながら心配しんぱいしていましたので、新聞記者しんぶんきしゃ

はな

に話はなしたものとみえて、このことが土地とちの新聞しんぶんに載のりました。

すると、生いきた人にんぎよう形かたの身みの上うえ話はなしが、たちまち町まちの中なかにひ

ろまったのでした。

ちようど、その日ひのことです。青年せいねんが、呉服店ごふくてんへた

ずねてきました。

「私わたしが、兄あにです。」といつて、少女しょうじよに面会めんかいを求めもとました。

けれど、彼女かのじよは、子供こどもの時分じぶんに別わかれたので、兄にいさんの顔かおをおぼえていません。

「ほんとうに、お兄にいさんでしようか？」と、少女しょうじよは、美しい目めで、じつと青年せいねんを見つめていました。

「なにしろ十年ねんもたったのだから、忘わすれてしまったのに無理むりはない。けれど、僕ぼくには、雪ゆきちゃんの小さな時分じぶんのかわいらしい姿すがたが、ありありと目めに残のこっているよ。」と、青年せいねんはいつて、

「僕ぼくも、覚悟かくごをして家いえを出でたのだから、りっぱな画家ががにならなければ、帰かえらないと思おもっていたのだ……。」「と、語かたりました。そして、ふところから、お母かあさんの写しゃ真しんを出だして、妹いもうとに見みせたのであります。

「一日いちにちだって、お母かあさんのことを思い出ださない日ひとてなかつた。」
 といつて、青年せいねんは涙なみだを落おとしました。

少女しょうじよは、いま、彼かれをほんとうの兄あにだと信しんじて、疑うたがうことができない。一時じに、喜よろこびと悲かなしみとで胸むねがいつぱいになって、張はり裂さけるようでありました。

「兄にいさん！ 兄にいさん！ ああ、私わたしは、とうとう兄にいさんにめぐりあつた。お母かあさん……なぜ死しになされたの、お母かあさん……。」「と、兄あににすがりついたのです。そして、もし、今日きょう兄にいさんにめぐりあわなければ、晩ばんには、あのおばあさんにつれられて、また遠とく、どこかへいつてしまつたであろう……と話はなしました。

「それは、片目かための白髪しろがのおばあさんじゃなかつたかい？」と、兄あに

は聞ききました。

「片目かためだったかもしれません。たいへんにしんせつな……。」

すると、かたわらに、いつさいはなしの話きを聞いていた主人しゅじんも、また兄あにもびつくりして、

「あのおばあさんに、見みこまれたら、どうしても逃にげられはしないということだ。怖おそろしいかどわかしのおばあさんなのだ！ 仲な間かまが、幾いくにん人あるかもわからない。きっと船着ふなつき場ばの町まちへ、おまえを売うるつもりだったろう。なんにしても、早はやくこの町まちから逃にげ出ださなければいけない。」といいました。

その晩ばんのことです。あちらには、港みなとのあたりそらの空をあかあかと燈火とうかの光ひかりが染そめていました。そして、汽笛きてきの音おとや、いろいろ

ろの物音ものおとが、こちらの町まちの方ほうまで流ながれてきました。また一方ほうは、
 はるかに、青黒あおぐろい山脈さんみやくが、よく晴はれた月つきの明あかるい空そらの下したに、
 えんえんと連つらなっていました。その広野こうやを青あおい着物きものをきて、頭あたまに
 うすべにいろぬの淡紅色たんじやくの布ぬのをかけて、顔かおを隠かくし、白しろい馬うまに乘のつて馬子まごに引ひかれ
 ながら、とぼとぼと山やまの方ほうを指さしてゆく女おんながありました。

馬うまはだまつていました。乗のつている人ひともだまつていました。そ
 して、馬うまを引ひいてゆく人ひともだまつていました。ただ月つきの光ひかりに、あ
 たりはぼうつと夢ゆめのようにかすんで、はてしもない広ひろい野原のほらに、
 これらの人ひとたちは、絵えのごとく浮ういて見みえたのです。

このとき、黒くろい人影ひとかげが、その後あとを追おつてきました。二人ふたり、三
 人にん、めいめい手てに棒ぼうを持もつてわめいてきました。とうとう彼かれらは、

馬うまに追おいつくと、行ゆく手てをさえぎつて、

「青あおい着物きものをきている。この女おんなだ。もうけつして逃にがしはしないぞ。」と、追おつてきたものどもはいいました。

馬子まごは、たまげて、その人ひとたちのようすをながめました。

「おい、この女おんなをどこへつれてゆくつもりだ？」と、一人ひとりは、たずねました。

「この方かたは、おしでございます。そして、今夜こんやの中うちに、あの山やまのいただきのお寺てらまでおつれもうしますのです。夜よが明あけると尼あまさんにおなりなさるのだそうでございます……。」と、馬子まごは、答こたえしました。

「まあ、いいから、ここから、馬うまを町まちまでもどせ！」と、追おつ手て

はせまりました。

ふたたび、月の明るい野原を歩いて、一行は、町はずれの橋の上までまいりますと、白髪のおばあさんがそこに立って待っていました。

「よく、私にだまって逃げたな。」と、おばあさんは、怒って、馬から女を引き下ろして、女のかぶっていた布を取りのけて、怖ろしい目で、顔をにらみました。

「え、これは、ほんとうの人形だ。私は、生きている人形をつれてこいといったのだ！」と、おばあさんは叫びました。みんなも、あつけにとられて、人形を見ました。

こうしている間に、ほんとうの少女は、もう兄さんとい

くへか、この町^{まち}から去^さった時^じ分^{ぶん}であります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 6」講談社

1977（昭和52）年4月10日第1刷発行

底本の親本：「未明童話集4」丸善

1930（昭和5）年7月

初出：「サンデー毎日 7巻49号」

1928（昭和3）年10月28日

※表題は底本では、「生《い》きた人形《にんぎょう》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：七草

2015年9月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

生きた人形

小川未明

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>